紅型衣裳三点を閲覧しての再考察

永津 禎三

「琉球美、造形研究会」では、2025 年 6 月 17 日に第二回目の「紅型衣裳見学会」を開催した。

今回は、沖縄県立博物館・美術館の所蔵である〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉及び〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉の三点の紅型衣裳を閲覧させていただいた。

〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉と〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉には同一の型紙を使った着尺が使用されていると考えられる。この二点が現存し、しかも両方が沖縄県立博物館・美術館所蔵であり、今回この二点を一緒に熟覧出来たことは実に有り難いことであった。

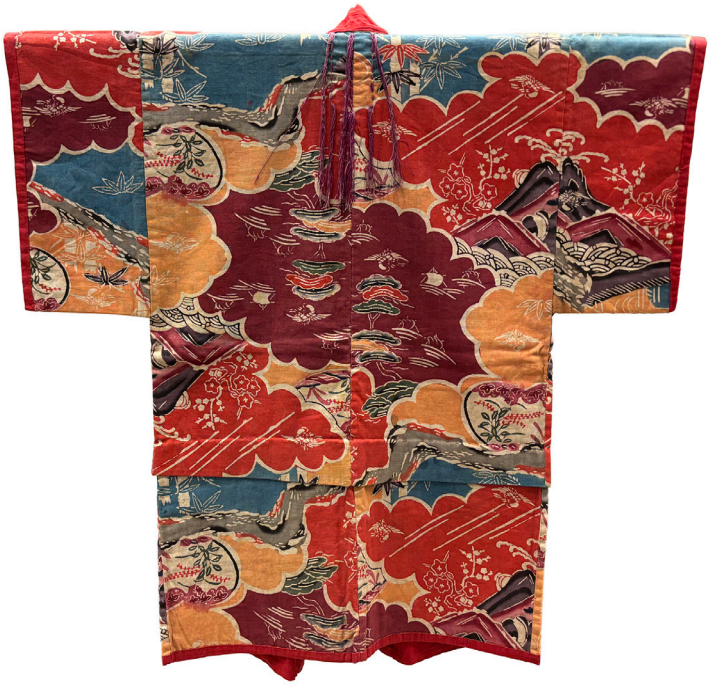
この二点を比較熟覧して、見学会前に書いた『〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉から考える』の内容を修正する必要を感じた。本小論では、まず、これから記してみたい。

また、〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉は、実に美しく洗練された模様の衣装で、かねてより熟覧したいと思っていた。その型紙も現存しているので、同時に閲覧できると思って閲覧申請書を提出したところ、私の勘違いで、型紙は沖縄県立芸術大学の所蔵であって、今回、一緒に閲覧することは叶わなかった。

型紙を一緒に閲覧したかったのは、図録等で衣裳と型紙を見た時、型紙の端の方のかなりの部分が衣装に仕立てられている時に隠れているように見えたからだ。

型紙と比較してのその確認は叶わなかったが、〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉を間近に閲覧して、その着尺の質感が予想外だったことから大いに考えさせられることがあった。このことについても最後に記してみたい。

〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉と〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉には同一の型紙が用いられたと考えられるが、染められた着尺は、かなりの部分で配色が異なる。最も分かりやすく、図版でも確認できたのが、〈子ども着〉の右の後ろ身頃と右袖が合わさって出来た黒い山で、〈衣装〉の方では、この山は桃色地に紺色の隈取りが施されていた。



〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉

〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉は模様が左右対称で、今回閲覧して分かったのだが、肩山でまた模様が反転している。この衣装は片面染であり、このように左右対称、身頃の面と背の模様が同一になるよう予め染められた着尺で仕立てられている。

これに対して、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉は、同じ向きの着尺の左右の端にある黒い山を着尺をずらすことで合わせていて、こちらの方が、模様の本来の意匠であるように思えた。

前小論『〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉から考える』では、二種類の仕立て方を推論して

〈染分地遠山に松竹梅模様衣装〉山の模様部分

みたのだが、これは『沖縄復帰 40 周年記念　紅型　琉球王朝のいろとかたち』展図録の作品解説に、この〈子ども着〉が「片面染カ」と記されていて、両面染の可能性もあると考えたためである。

しかし、今回閲覧してみた結果、両面染が施されている可能性は殆ど無いと考えられた。従って、この〈子ども着〉に仕立て直される以前の〈衣裳〉が左右対称の図柄であった可能性は殆どなく、また、前小論で推論したもう一方の〈衣裳〉も片袖部分に反転した図柄を用いたが、これもありえないと考えるに至った。

今回、改めて〈子ども着〉に仕立て直される以前の〈衣裳〉を想像してみるにあたっては、より実際に近い色合いで作ってみた。前小論で用いた図録図版の色彩が白けた色彩で、実際の衣裳の印象とかけ離れたものだったからだ。

型紙一枚分と推測する一単位の模様は、前回同様　〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉の図版からしか抜き取れないが、実際に閲覧した〈子ども着〉の色彩に近づくよう、この図版を修正して行った。色使いが異なっていた主要な部分は、第一には前述した山の模様の部分である。その他の数箇所での違いがよく分かる写真を示そう。

〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉部分

〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉部分

このように、かなりの部分で配色が異なっていたので、実際の色彩に近づけながら、〈衣裳〉の配色から〈子ども着〉の配色に修正した。

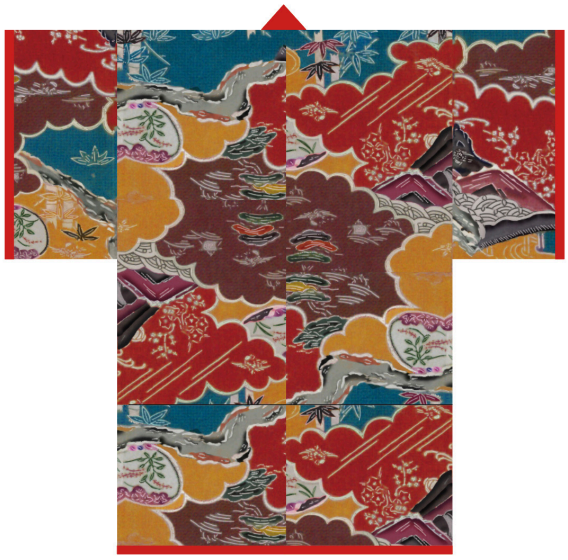
〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉の図録写真から型紙を想定し一単位分の模様を抜き出した図

左の図を〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉を実際に閲覧して全体の色彩や配色を修正した図

〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉と〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉を実際に閲覧比較してみると、配色の違い以上に、違いが感じられた。〈衣裳〉の染は丁寧ではあるが、平板であまり魅力を感じないものだった。〈子ども着〉は染め色がはみ出したりしていて仕事は荒いが、全体としてみると、それぞれの色彩が活き活きとしているように感じた。

そのような質感までは、なかなか表せないものの、修正した一単位を配列して着尺のイメージを作り、着尺の幅を詰めて、〈子ども着〉を作図してみた。丈は長めのものを折り込んで今の形になっているので、その両方のイメージを作図した。

〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉丈を折りこむ前の作図



〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉現存状態の作図

この作図したものと実際の〈子ども着〉を比較し、違和感がなかったので、〈子ども着〉に仕立て直される以前の〈衣裳〉がどのようなものだったかを想像する作図を続けて行った。前小論では、〈子ども着〉の着尺が両面染だった場合、〈衣裳〉から仕立てなおす際に、裏返して用いたのではないかと考え作図したが、今回は、片面染ということで、模様の向きは〈子ども着〉と同じ向きにした。右袖だけ生地の向きを上下逆にしてみた。これは前小論でも述べたように、一箇所は「破調の箇所」を作る琉球の美的感覚を倣ったつもりである。片面染なので、裏返しの模様は使えないので、上下逆の模様でバランスを考えた。

〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉を仕立てなおす以前の〈衣裳〉想像図

ここまでの作図工程を分かりやすく示すために、アニメーション的な動画にまとめてみた。

着尺の幅を詰め、切り落とした着尺の部分が袖として使われていること、一旦出来上がった〈子ども着〉の丈が短く折り込まれ、現存の可愛らしい構成になっていることなどを、動画で分かりやすく見せることができたのではないかと思っている。

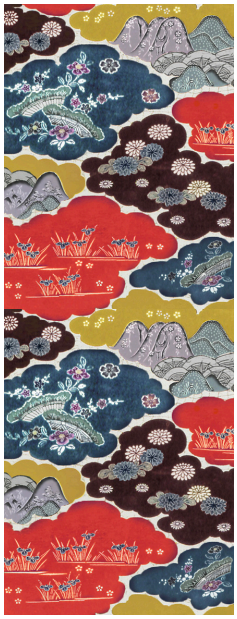
子ども着に仕立て直される以前の〈衣裳〉とは

実は、この動画は２作目で、最初に作ったのは〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉の方である。

前小論でも、この衣装で、2013 年に色面的な仕事を試みようとして途中で断念していたことを述べたが、まずは、この型紙に、閲覧して確認できた色彩を再現してみようと思ったのが作図の始まりだった。

実際に型紙に色彩を置いていくことで、紅型の色彩の妙を強く実感することができた。その感覚を伝えることが出来るのではないかと思える A と B の二つの図を示してみたい。

A



B

A は型紙に色を置いていく途中の過程、菖蒲の花にまだ色を置く前の段階である。B は最終的に全ての色を置き終えた段階である。型紙一つ分でも分かるが、二つ繋ぎ着尺になったような状態でより明確に分かるだろう。菖蒲の紺色は地の朱色と補色に近く、この紺色の有る無しでこんなにも全体の色彩の響き合いが変わってしまうことを。

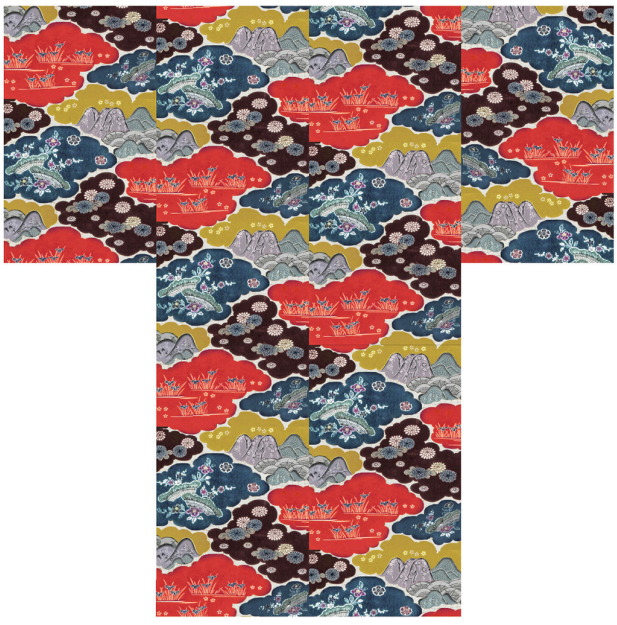
私が、2013 年の時に色面の仕事を断念したのは、このような色彩の響き合いのところまで仕事を進めなかったことも一因だろう。紅型の配色の妙とはまさにこのようなことである。単純な色面の組み合わせだけでは到底理解できないものだ。

それで、この型紙を彩色していく工程、彩色された型紙を縦に並べ着尺の状態にする工程、着尺を組み合わせて衣裳に仕立てる工程、更に、着尺の幅を詰めて〈子ども着〉を想像する工程を作画していった。

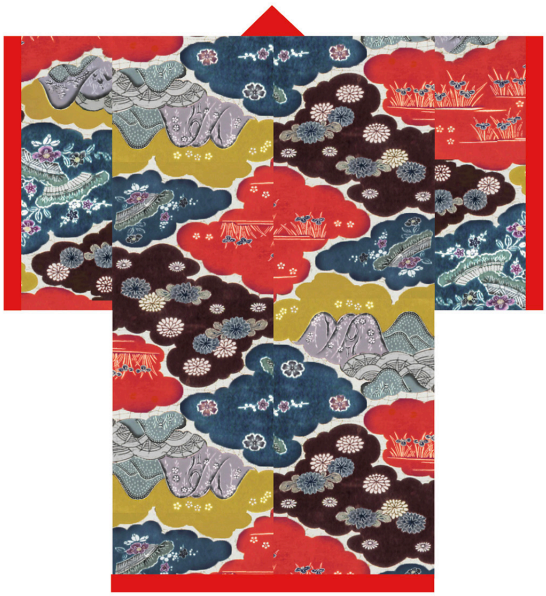
この工程を全てアニメーションのように繋いでみたのが最初の動画である。

型紙を彩色し、子ども着まで想像してみた

〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉を写真撮影し背景を白抜きしたもの



彩色した型紙を用い、着尺から〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉を作図したもの



彩色した型紙を用いた〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉を子ども着に仕立て直した想像図

〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉の着尺を使った〈子ども着〉を想像するにあたっては、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉の方法を踏襲した。

つまり、着尺の幅を詰め、切り落とした部分を袖として使うという仕立て方である。

実際に作図してみて、赤い裏地が実によく考えられていると実感した。襟や袖口、裾に赤い色が見えて、子ども着の可愛らしさを強調もしているが、切り落としの部分を袖に使ったために、袖の幅が若干狭いこともこの袖口の赤い裏地が補っていることに気付いたのである。

意匠としては、この作図の状態にほぼ満足しているのだが、後述するようにこの〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉の生地が非常に繊細なものであったので、このような裏地がつく仕立て方は、実際には行わないのだろうとも考えた。そのような意味で、この作図はあくまでも意匠としての考察に止まるものだ。実際にこの生地を使って子ども着に仕立て直すとすれば、おそらくは、単の爽やかな衣裳に仕立てるのだろうと想像する。

ここで、最後に、このように実際に仕立て直すなら単の衣裳にするだろうと考えた、この生地の繊細さしなやかさについて言及してみたい。

この見学会で〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉も閲覧しようと考えた最初の理由は、型紙も一緒に閲覧できると思ったからだった。非常に美しく洗練された模様の衣裳であるから、型紙が一緒に見れなくても、やはり閲覧資料から外さないでおこうと考えた程度だった。

ところが、この衣装を学芸員の伊禮拓郎氏が衣桁に掛けるため、包みから取り出しテーブルに拡げた瞬間、「この布は何なのだ！」と衝撃が走った。衣裳を拡げる時の布のしなやかさや張り、その薄さや均質さは驚きだった。

妻の禮子も同様に感じ、二人ともに、これはまるでジャワ更紗のようだとの思いが一瞬頭をよぎった。

型紙との比較で、この衣装の着尺は、どれだけ縫い代を取られているかに興味を持っていたので、初めに縫い代の幅を確認した。すると、ほぼ 1cm 程度、普通の縫い代幅だったが、この生地には耳がなく断ち落とされていたことが分かり不思議に思った。

マイクロスコープで確認した生地の糸は細く均一で、繊維が長く、z 撚りの撚り掛けもゆるい均質な糸だった。打ち込みも強く、手紡ぎ糸の手織布とは全く異なって見えた。

帰宅後、禮子さんと検討を重ね、〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉の生地は、上質な紡績糸を力織機で織ったものではないかとの推論に達した。

19 世紀に、イギリスでは「キャンブリック」という、紡績による非常に細い糸で緻密に織られた薄手の木綿布が力織機で生産され、これがジャワ更紗の生地として使われている。もしかしたら、この「キャンブリック」が琉球に舶来し、これを、着尺幅に切って用いたのではないか。生地に耳がなく断ち落とされていたのは、このためだったのではないかと考えられるのである。まだ、推論に過ぎないが、大いにあり得ることだと考えられる。

また、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉〉と〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉も糸が z 撚りだったので、こちらは紡績糸の手織かもしれない。いずれにせよ、第一回目の「紅型衣裳見学会」で閲覧した〈桃色地小紋文様紅型木綿衣裳〉に比べ、今回閲覧した三つの衣裳は、近代工業の足音を感じる、かなり新しいものであると考えられる。

紅型衣裳三点を閲覧しての再考察

著者：永津禎三

私家版
2025 年 7 月 25 日発行